



1 浦田町長への出発あいさつ。2,3 日本航空の翼で那覇空港へ。4 ホームステイ先、中城村での交流会。5,6 世界遺産の中城城と首里城を見学。7 平和祈念堂で千羽鶴を献納。8 全員で平和への祈りを込めて折り上げた千羽鶴。9,10,11 「美ら海水族館」「守礼門」「万座毛」など、心に残った観光スポット。12,13 沖縄の文化を知り、命の重さと平和の尊さを胸に刻んだ子どもたち。14,15,16 「ひめゆりの塔」と「ガマ」の前に、犠牲者のめい福と世界平和を祈った。

特集 ● 祈り 63年目のオキナワ

【鉄の暴風】

沖縄戦で米軍は物量作戦による空襲や艦砲射撃で、およそ3万発におよぶ弾丸や砲弾を打ち込みました。「鉄の暴風」と呼ばれた砲撃の威力は、沖縄の風景を一変させるすさまじさでした。ある者は砲弾で吹き飛ばされ、ある者は追い詰められて命を絶ち、ある者は飢えとマラリアで倒れました。日本側の死者は18万8千136人（うち住民9万4千人）、米軍の死者は1万2千520人、あわせて20万656人が犠牲になっています。県外出身者数では北海道に次いで福岡県が4千13人と多く、25人の福岡県出身者が命を落としました。



↑雨のように激しい砲火を浴びせる米軍（写真／沖縄県平和祈念資料館）

かつての激戦地で誓う
命と平和のリリース

太平洋戦争最後の年となる昭和20年3月26日から始まった沖縄戦。沖縄諸島に上陸した米軍と日本軍との激戦は、住民を巻き込んだ国内最大規模の地上戦となりました。日本軍は水際迎撃を避け、地下陣地などの持久作戦をとります。やがて住民や日本兵は南へ南へと押しやられ、沖縄本島南端は血の海と化しました。喜屋武岬には畳1枚あたり100発に相当する数の弾丸が米軍によって撃ち込まれたといいます。組織的な戦闘はおよそ3か月も続き、終戦までに20万人以上の命が失われました。追いつめられたガマの中

では、投降する前に肉親間で命を絶つ集団死などの悲劇を生みました。この「少年の翼」で子どもたちが訪れた平和祈念公園がある糸満市摩文仁には、地元で「ウージ」と呼ばれるさとうきびの広大な畑が広がっています。かつて沖縄戦最後の激戦地だった公園内には、犠牲者の名が刻まれた石碑「平和の礎」が太平洋を望むように並んでいました。子どもたちは、いかに多くの命が失われたかを痛感しながら、戦没者の思いを平和の尊さの礎として、大切に引き継ぐことをここで誓いました。世界に平和を発進する摩文仁の丘に立った18人は、ウージを揺らすやわらかな風と沖縄が今に訴えかけるメッセージを胸に刻みました。

少年の翼で小さな瞳に映った――

沖縄

およそ20万人もの尊い命が奪われた島、沖縄。今から63年前「鉄の暴風」がこの地に吹き荒れました。福智の子どもたちが海を渡り、美ら島の「声なき声」を聞き戦争の残酷さを肌で感じた「少年の翼」。この夏、平和のバトンを未来へつなぐために18人が沖縄戦の実相と教訓を胸に刻みました。



廣渡 義則 交流事業実行委員長（弁城）

沖繩の県花「デイゴ」。地元の人はこの花に特別な思いを抱いています。沖縄戦はデイゴが咲く時期に始まり、人の命も花とともに散っていききました。そして、地元で「ガマ」と呼ばれるいくつもの自然洞穴の中では、逃げ場を失った数多くの命が失われました。福智の子どもたちが千羽鶴と花をささげた「ひめゆりの塔」は、女学生など80人あまりが命を落としたガマのそばに、ひっそりと建っています。花期の終わったデイゴの林が見守るなか、子どもたちはここで静かに目を閉じ、黙とうをささげました。旧方城町から数えて15回目の夏を迎えた「少年の翼」は、沖縄県中城村の子どもたちと相互訪問し、交流を深めながら視野を広げる実行委員会主催の事業です。8月2日に町内の小学5・6年生18人が空路で沖縄入りし、中城村で2泊のホームステイを体験。子どもたちは沖縄の文化と戦争の悲惨さを受け止めました。初回から事業にたずさわった廣渡義則実行委員長は言います。「異文化体験も大切な学びですが、当初からの事業の趣旨はあくまでも平和学習です。子どもたちはここで『オキナワ』を肌で感じています。ですから慰霊の地で涙を流す子はいなくても、ふさぎける子はひとりもないのです」。